

ナルニア国物語

魔術師のおい

11

C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

第11話 アンドリュー伯父の受難の始まり(前編)





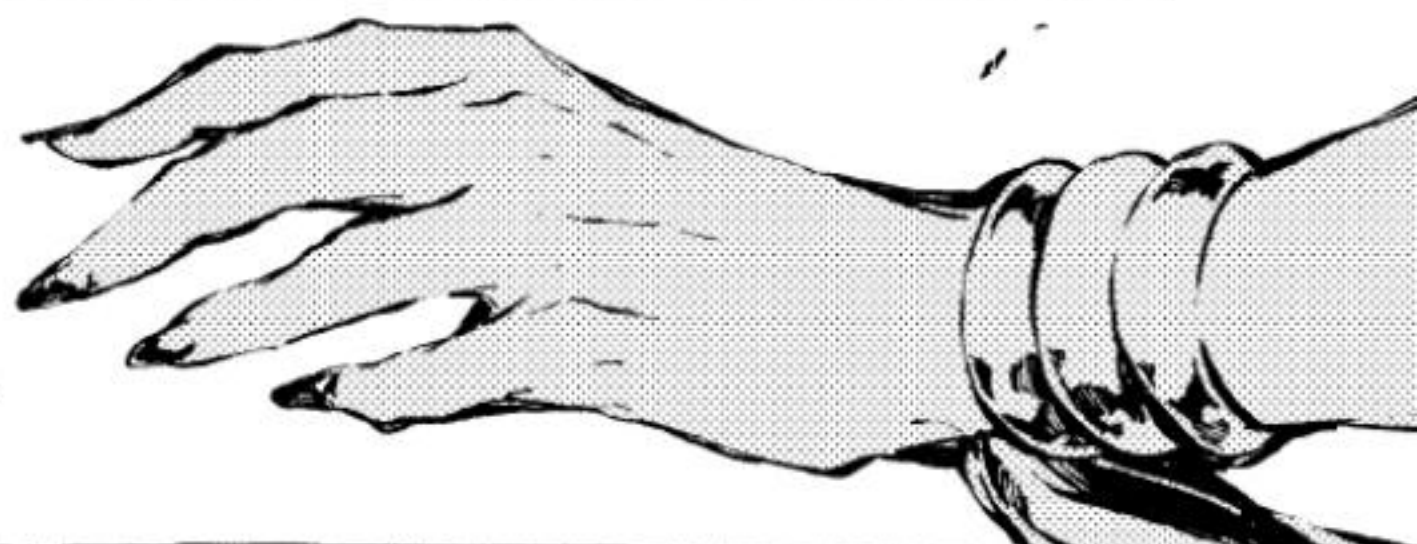
放してよ！

放してっ
たら！

ぼく
さわってないよ！







…この指輪

ひとつの世界から
別の世界へ
移るには

指輪を自分で
指にはめたり
直接触ったり
している
必要はなく

指輪に
触っている人に
さわってれば

それで
十分なんだ…!

早く
ディゴリー!



こんな
恐ろしい場所に
置いていく
つもりでは
なからうな？

これが
国家の論理って
やつよ

これでは
死んで
しまう……

あんたが自分の国で
たくさんの人たちを
殺したのと同じよ

早く

デイゴリー





どうしろって
言うんだ？

馬鹿なこと
言っていないで

…ああ

もう！

そんなの
ごまかしに
決まってるわよ

早くして























…ここで
女王を
見ると

ほとんど
人間ばなれ
してるな



魔女と並べると
取るに足りないカス
みたいなもんだ



…でも



あの女の顔
ケタリーさんの表情に
どこか似かよって
いるわ…

邪悪な
魔法使いの
表情…

つまりこれが
魔術師のへしるし
なのね

…へん

ばか
みたいだ！

伯父さんが
魔術師とはね！

冗談も
いいところだ

本物の
魔法使いってのは
あの女王のことを
言うのさ



わらわを
この世界へ呼びつけた
魔法使いは

どこに
おるのじや？



マダム

……えー



まことに
名誉なことで
ございまして――

ありがたき
幸せで――

思いもかけぬ
歓びで
ございまして――

その……

ささやかなる
準備をする暇さえ
ござりますれば――





その
わたくし
も――

…その
わたくし
が――

魔法使いは
どこにおるか
と聞いておるのじゃ

馬鹿者



わたくしで――

ここに
おりまする
いたずらっ子
どもが
失礼を
働きました
ならば

なにぶん
どうか
お許しを

悪気など
ひとつも

もちろん

そちがか？



わたくしめで
ございます

マダム







なるほど

.....

たしかにそちは
魔術師のはしくれの
ようじゃな

立て

犬め

そんなところに
伸びておるでは
ないわ

女王の
御前であるぞ

そちは
どのようなして
魔術を使うように
なった?

そちに王家の血が
流れておらぬことは
わらわが断言する

はあ――

あの

たしかに

……その

厳密な
意味では
そうかも
しれませんが

……しながら
ケタリー家は
たいへんに古い家柄で
ございました

ドーセットシャーの
旧家でございます

マダム――

黙れ

厳密には
王族では
ございません

マダム

そちの正体など
わかっておるわ

そちは
本に書いてある
型通りの魔法しか
使えぬ

ケチなつまらぬ
魔術師にすぎぬ

そちの血にも

心の臓にも

本物の魔術など
やどっておらぬわ

わらわの世界では
そちのような類いは
千年も前に
根絶やしにしてやった

ありがたき
幸せ――

何なりと
よろこんで
お役に――

口数が多い

だが

この世界では
下僕として
使ってやろう

お役に
立ちまする

はい

黙れ！

最初の
仕事じゃ

よく聞け

ここは
大きな街と
見た

ただちに
チャリオット
なり

空飛ぶ
じゅうたんなり

調教すみの
ドラゴンなり

そのほうどの国で
貴人が使うに
ふさわしい乗り物を
調達してまいれ

そのあと

わらわの地位に
ふさわしい
着物や宝石や奴隷を
手に入れられる
場所へ案内せよ

あすから
この世界の征服に
とりかかる

は…

はいっ

ただいますぐに
馬車を呼んで
まいります

待て

裏切りなど

ゆめ考えるで
ないぞ

わらわの目は
壁とおして

人の心の中まで
見ることが
できるのじゃ

どこへ
行こうと

わらわの目が
見えていると思え

命令に
そむくそぶりが
見えたら

即座に
呪いを
かけるから

忘れるな

呪いによって

そちが
腰を下ろそうと
するものすべてが
灼けた鉄のごとく
熱く感じられ

ベッドに
横たわれば

かならず足もとに
目に見えぬ
氷の冷たさを
感じることに
なるであろう



さあ

行け

つづく